

S - 1 - 4

Low T3 syndromeと虚の病態について (神経食思不振症を中心に)

千葉大学 医学部 第二内科

○龍野一郎

Low T3 syndromeとは種々の疾患患者や特殊な病態において甲状腺機能低下症を認めないにもかかわらず血液中の甲状腺ホルモン濃度(Free T3)が低下した病態であり、Nonthyroidal IllnessないしEuthyroid Sick Syndromeとも呼ばれている。このような病態を起こす原因疾患としては、発熱、敗血症、心筋梗塞、肝硬変、慢性腎不全、AIDSなどの重度全身性消耗性疾患に加えて、飢餓・絶食などの低栄養病態をあげることができ、その代表疾患として神経性食思不振症がある。神経食思不振症は漢方で言うところの虚の病態と類似し、我々は大建中湯を投与してその臨床症状が改善する例を報告してきた。そして、臨床症状の軽快とともにLow T3 syndromeが改善することを見だし、このような病態の客観的指標として甲状腺ホルモン(Free T3, Free T4)の測定が有用である可能性を見いだした。甲状腺ホルモンT4は甲状腺から分泌され、末梢組織(肝、腎、筋肉)でヨードが一つはずれる脱ヨード反応によって活性型のT3に変換されるわけであるが、Low T3 syndromeを引き起こす病態としては甲状腺ホルモン(T4)の代謝異常が重要視されている。T4の脱ヨード反応による活性型のT3に変換は5'-脱ヨード酵素により行われ、Low T3 (T4)syndromeではこの酵素活性が抑制されることにより、代わりに5-脱ヨード酵素により不活性型であるrT3に変換される経路が増大することがその病態と考えられる。このような5'-脱ヨード酵素の活性抑制には様々な因子が関与するが、従来より重視されてきた副腎コルチゾルに加えて、近年 各種サイトカインが5-脱ヨード酵素活性の抑制に関与し病態形成に重要である可能性が示唆されている。本シンポジウムにおいてLow T3 syndromeの成因を解析する目的で特に神経性食思不振症を取り上げ、視床下部・下垂体・副腎系の機能亢進や血中サイトカインの変動の関与について自験例を含めて概説する。